

「絶滅危惧器具(3)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

しかし、本校では今でも「アルコールランプ」を捨てていない。メタノールも一斗缶で購入している。教科書でも、今のところアルコールランプがメインで、「実験用カートリッジガスこんろを使っても良い」という扱いになっている。

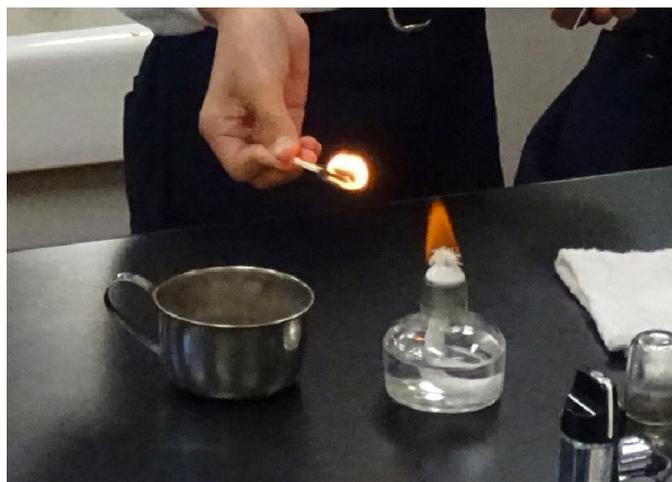


4年生の子どもにとって、まずはマッチに火を灯すということ自体が、未知の体験である。私が子どもの頃は、ガス風呂釜に点火するのは子どもの仕事だった。母が「お風呂に火つけて～」と言うと、「ハ～イ」とばかり、マッチ箱を持ってお風呂場に行ったものだ。まさに、毎日マッチを使っていた。しかし、今の子どもたちの生活の中にマッチはない。キャンプや林間学校での飯盒炊きで使うぐらいだろう。正しいマッチや箱の持ち方から、丁寧に教える必要がある。



マッチの炎は、芯から気化したアルコール蒸気に吸い取られるようにして点火する。この様子は横から観

察させると良い。「あ！火が吸い込まれるみたいに芯についた！」と気づくだろう。



最も大切なことは、安全に実験することだ。「燃えやすいものが机上にないこと」「ぬれぞうきを複数用意すること」「髪の毛の長い女児は、後ろに結ぶこと」などは事前に指導する。しかし、一番多いのは、「マッチを持ったまま火傷する」例である。どうしても、炎を下に縦にマッチ棒を持ってしまう子どもが多い。特に火のついたままのマッチ棒を、燃えさし入れに入れようとしてうまく入らず、火傷することが多い。



まずは「火がついたら、水平に持つこと」を徹底して指導しておく必要がある。しかし、熱いと感じたら、さまざまな回避方法がある。燃えさし入れに放り込めばいいのだが、どういうわけか、子どもの指から離れないこともある。その場合は、息で消せれば消して良い。それも間に合わない場合は、机上に放り投げる、床に放り投げる、或いはぬれぞうきんで手ごと覆って消す・・・などの方法がある。要は「火傷する前に炎から逃れる」ことが大切なのだ。

こうした一連の安全指導は、便利なカートリッジガスこんろではできないことだ。大人になる前に、マッチの安全な使い方ぐらいは体験させておきたい。